

CONTENTS

- 特集・チャールズ&レイ・イームズ
- ライブラリーで見られるイームズの映像作品
- イームズ・バイオグラフィ
- 作品介绍

IMAGE LIBRARY NEWS

●●イメージライブラリー・ニュース 第7号 2001年4月●●

イメージライブラリー・ニュースは4月・6月・9月・11月に発行の映像に関するミニ情報誌です。バックナンバーは館内でご覧になれます。

特集

チャールズ&レイ・イームズ

Charles Eames 1907 ~ 1978

Ray Eames 1912 ~ 1988



アメリカのモダンデザインの象徴といわれるイームズ・チェア。制作者はチャールズと妻レイのコンビである。

彼らは新素材の利用と革新的なデザインで近代家具の歴史に大きな進展をもたらした。彼らは家具のデザインのみならず、建築、映像制作の分野にお

いても大きな功績を残している。幅広い視野と好奇心をもって多分野に活躍したイームズの足跡を追い、その様々な仕事に共通するクリエイターとしてのイームズの魅力を探る。

一組の男女がミシガン湖の近くの芝生でピクニックを楽しんでいる。

傍らには家から持ってきたであろう昼食と、お気に入りの品々が散らばっている。掛け時計、ハーシーズのチョコレート、“SCIENCE” “THE VOICE OF TIME” というタイトルの本。

横たわる男性の手を常に中心にして、極大と極小のすべての旅は、ここから始まる。



10⁰ m 1m

すべてのスケールの基本となる単位である。私たちの日常生活では会話やふれ合いが成立するなじみのある距離感でもある。

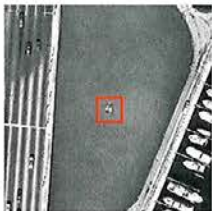
『パワーズ・オブ・テン』 (Powers of Ten) 1977年 (8min 50sec)

人間を中心とした世界を1メートル離れたところから1メートル四方の画像でとらえ、10秒ごとに10倍の速さでズームアウトしていく。画面の中心におかれた人物は、わずが10秒で見えなくなり、代わって広大な地球を、さらに宇宙の姿を見せてくれる。これは1957年に出版された『Cosmic View』をヒントに制作されたチャールズ&レイ・イームズのフィルム作品である。

『Cosmic View』はオランダの教師キース・ボークによって書かれた本で、幼い子供から物理学者までが科学的な概念を正確に理解できる、目に見えない宇宙の姿から細胞を構成する電子までを単純明解なイラストで解説されている。

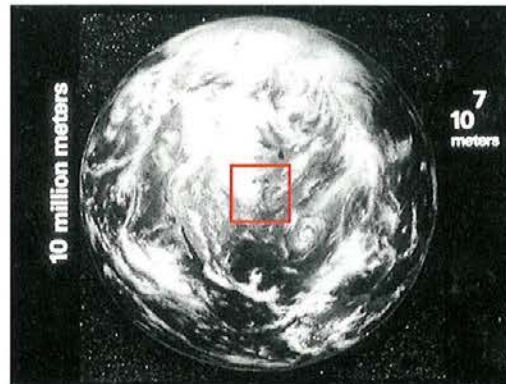
1968年に大学物理学協会の依頼で制作された映像は『パワーズ・オブ・テン-ラフスケッチ』とされ、9年後にはIBMの委嘱を受け、新たに『パワーズ・オブ・テン』として制作された作品には、この間の科学の進歩が加味されている。

科学的知識を必要とする映像制作には、マサチューセツ工科大学の物理学、天文学教授のフィリップ・モリソンが協力。また音楽は『荒野の7人』『十戒』などの映画音楽を手がけるエルマー・バーンスタインが担当している。



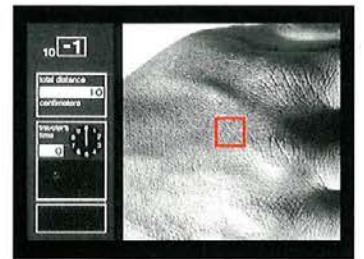
10² m 100m

人間が10秒で走る距離。自然界に存在する生命体で100mをこえるものはほとんどない。巨大セコイアで80m、シロナガスクジラでは30mくらい。



10⁷ m 10000km

ほぼ地球全体が眺められる。この地球が球体なのは、プトレマイオスの時代から言われてきたことだが、実際にその姿をとらえられたのは1967年になってからのことだった。



10⁻¹ m 0.1m 10cm

私たちの手をほんの少し拡大した画像である。(パワーズ・オブ・テン-ラフスケッチより)

10³ m 1000m

レーシングカーが10秒で走る距離。



10⁵ m 100km

人工衛星が10秒で地球を横切る距離。シカゴの人口密集地はミシガン湖の南に広がっている。



10⁻⁸ m 100 オングストローム

DNAの二重らせん構造が見える。DNAをつかさどるアデニン(A)、グアニン(G)、シトシン(C)、チミン(T)という4種類の分子文字はすべての生命体に共通する。



……エリオット・ノイス……
Eliot Noyes 1910~77

ハーバード大学で建築を学び、バウハウスの創立者として有名なヴァルター・グロピウス等に師事。戦後の時代に重要な影響力を持った工業デザイナー。近代美術館の主事を務めた後、IBM社のデザインディレクターに就任した。イームズが手がけたIBM社の特殊映画、展示会のデザインはノイスが会社を説得し依頼したものであった。

……ジョン・エンテンザ……
John Entenza

アーツ・アンド・アーキテクチャ誌編集長。若い建築家の作品を取り上げ、国際的にも注目を得た。この雑誌にはもともとチャールズは編集、レイは表紙デザインの仕事に携わっていて、公私に渡り交流があった。

……イェーロ・サーリネン……
Eero Saarinen 1910~61

イェーロは父のエリエル・サーリネンが校長を務めていたクラムブルックで教鞭をとったこともあった。オーガニック・デザイン・コンペにおいて優勝したイームズとの共同作品は商品化が約束されていたが、当時ブライトウツの量産技術がなかったために実現されなかった。彼がデザインしたノール社製造の椅子、「ウーム・チェア」「チューリップ・チェア」は20世紀の家具の歴史において最も影響力のあるデザインの一つである。

ハーマン・ミラー社

ミシガン州の家具制作会社。1946年のニューヨーク近代美術館のイームズの展覧会をきっかけに、デザイン部長に就任したばかりのジョージ・ネルソンの計らいによって当時新進デザイナーであったイームズの家具の製造が実現した。



ギブス 1942年

チャールズとサーリネンが開発した人の足の形をしたギブス。依頼元のサンディエゴ海軍はこのギブスを5000個注文するほど感銘を受けた。



オーガニック (有機的) デザイン・コンペ 1940年

オーガニック・デザイン・コンペで優勝したチャールズとサーリネンの共同作品。

ユニットのシステムキャビネット、椅子、テーブル。ニューヨーク近代美術館が公募し、結果は展覧会で発表された。出品する図面と模型の制作を手伝ったレイは後にチャールズの妻となり、個人的な側面でも意義深いものになった。

クラムブルック・アカデミー・オブ・アート

デトロイトの新聞王ジョージ・ブースがデザイン改革運動のための新しい教育機関として1932年に開校。フィンランド生まれの建築家兼デザイナーであるエリエル・サーリネンを校長として招き、イームズ、イェーロ・サーリネン他、多くの才能を輩出した。

アーツ・アンド・クラフツ運動

19世紀後半に機械生産への反省、手芸的生産の回復を提唱したイギリスのウィリアム・モリスの考え方を中心に展開された美術工芸運動。良質の芸術とデザインは社会を変えることができるという信念のもと、グッドデザインの工芸品の普及を目的としていた。

Charles Eames & Ray Eames

クラムブルック・アカデミー・オブ・アート時代
チャールズ・イームズは1907年にセントルイスで生まれた。特に建築家としてのアカデミックな教育を受けていないが、少年時代からフランク・ロイド・ライトに憧れ、ヨーロッパ旅行ではミス・ファン・デル・ローエヤル・コルビジエの作品を見て歩いたという。20代前半に建築家としての活動を始めるが、それは順調だったとはいえないものであった。しかし、セントメリー教会の建築がエリエル・サーリネンに認められクラムブルック・アカデミー・オブ・アートで学ぶ機会を得るのである。

クラムブルック・アカデミー・オブ・アートは芸術と手工芸を合わせ持った考えであるアーツ・アンド・クラフツ運動の趣旨に沿った運営方針を持ち、フィンランドから来たエリエル・サーリネンはここにスカンジナビア・デザインを紹介した。そこで、チャールズ・イームズは彼の制作活動を支えることになる2人の人物に出会う。1人は抽象画を学んでいたバーニス・アレクサンダー・カイザー(レイ・カイザー)で、彼女は後に彼の妻となり、公私に渡り彼の全創作活動を支えることになる。もう1人はエリエル・サーリネンの息子であるイェーロ・サーリネンで、彼らは北欧の木工技術をヒントに、ベニヤ板を曲げた椅子を作り始めた。

クラムブルック・アカデミー・オブ・アート時代
椅子のデザイナーとして知名度の高いイームズだが、実は驚くほど多様な作品を制作してきた。一見、全く違ったジャンルで非凡な才能を発揮させているように見えるのだが、それらは各々の独立したジャンルではなく、構造物を構造的に把握しようとする姿勢で臨まれる。彼は「私は我々の周りを取り囲む問題を、構造上の問題として見ている。その構造が、建築なのである。」「自分の職業は建築家である」と語っている。

クラムブルック・アカデミー・オブ・アート時代
1つの幕(べき)、つまり乗数をこえると、もうそこには人間の気配はない。10の乗数がプラスの方向へ向かうほど、画面はズームアウトしていき、橋や道路などの人工物と川や森などの自然物をとらえることしかできない。逆にマイナスの方向へ進むことで画面はズームインされ、普段私たちの目でとらえることができない有機体の組織の一部を見せてくれる。

クラムブルック・アカデミー・オブ・アート時代
しかし、この映像では一つのラインを進むという一貫した法則によって、ユニバースの概念が具体化されることで、私たちがこの線上で確かに生きていくことを感じさせてくれる。見方を変えると、この映像作品はイームズの創作活動全体と相似形をなしている。

クラムブルック・アカデミー・オブ・アート時代
1946年、ハーマン・ミラー社はイームズの後援者となることで革新的な家具を量産するようになる。かつて一緒に合板実験を行っていたサーリネンは同年、ウーム(子宮)チェアを発表した。

クラムブルック・アカデミー・オブ・アート時代
この成形合板(モールドド・ブライウッド)は、木材を薄くはいてそれぞれの板を、繊維方向を交差させながら張り合わせ、オス型とメス型の中で、高周波電圧によって加熱、加圧することで成形する方法であり、現在では一般的な工法である。強力な接着剤とシエル構造のため、比較的軽い合板で強度が得られることで、椅子の加工に適している。

クラムブルック・アカデミー・オブ・アート時代
1941年、イームズ夫妻は結婚後ロスに転居し、MGM映画スタジオのアート・ディレクターとして職を得た。また、クラムブルック・アカデミー・オブ・アート時代に着手した合板技術は、自由な曲線をも成形することができるようになり、サンディエゴ海軍のギブスとして採用され5000個が量産された。それは従来の冷たく重たい金属製の不自由なギブスから病人を解放した。体温を持った人間が、金属の冷たさを嫌うことは、まして病人であれば、容易に想像できよう。

クラムブルック・アカデミー・オブ・アート時代
1940年にニューヨーク近代美術館のオーガニック・デザイン・コンペにおいて、イームズとサーリネンは収納家具部門で1等を受賞している。当時、ニューヨーク近代美術館の工業デザイン主事であるエリオット・ノイスはこのコンペの目標を「家具・照明と織物について今日の生活に役立つ美しい環境を創造する能力あるデザイナーたちを発見することである」と語っている。まさにこのコンペはアメリカン・モダン・デザイナーとしてのイームズの以後の活躍を予測させるものであった。

クラムブルック・アカデミー・オブ・アート時代
元来、曲木による家具制作はミヒヤエル・トーンネットが設立したウィーンの家具メーカーであるトーンネット社によって、1800年代中期に合板を重ねたものを加熱して曲げる方法が開発されていた。この方法は進歩的なデザイナーに取り入れられたが、中でもフィンランド人のアルヴァ・アアルトは北欧の天然素材である材木を積層処理して曲げ、柔らかく有機的なデザインをつくり出していた。イームズとサーリネンは彼らに触発され、曲木の実験を始めるのである。

L・Aへの転居



ラウンジ・チェア

1956年、友人である映画監督ビリー・ワイルダーへの誕生日プレゼントとしてデザインされた。黒い皮と厚いクッションが張られた積層のローズウツの椅子とオットマン(足のせ台)のセットは、究極の快適性を意図したものであった。ハーマン・ミラー社がこの椅子の生産に乗り出すと、10万脚以上売れるという大成功を収めた。



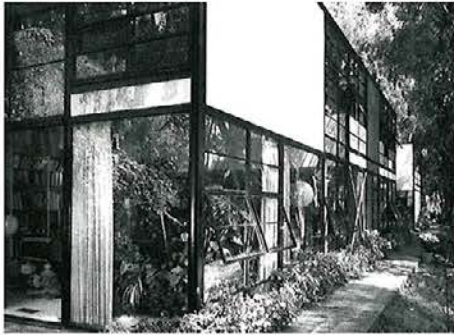
イームズ邸内部



ラウンジ・チェア説明図

イームズ邸

プレハブの規格化された工業部材で建てられたイームズ邸。鉄骨の使用は当時革新的であった。リビングには透き通るカーテンから木もれ日が差し込み、夫妻のコレクションがレイの手によって飾られている。イームズ邸は絶頂を極めたモダニズムが結局のところ人間的なものになりえるということを示している。



シェル・チェア 1950年
(イラスト/ソール・スタインバーグ)



ウーム・チェア 1946年

Charles Eames & Ray Eames

イームズは戦後の住宅不足を解決しようという目的と、戦中、カリフォルニアの軍需産業の中から開発された新素材を利用しようという意図の下で計画を進めた。イームズ邸はプレハブの工業用に規格された鋼材でつくられたため、メインフレームはわずか1日で組み立てられた上、軽量の鋼鉄梁は作業を迅速化させた。イームズ夫妻がここに暮らした様子は、「HOUSE after five years of living」という映像作品の中で見ることが出来る。彼らの5年間の生活の中で撮りためられたスチール写真がフィルム映像として再構成されているのだが、工業製品から生まれた住居の中で、生き生きと日々変化しているであろう彼らの生活感を映し出している。この映像を見るに、わずか1日半で施行されたプレハブ住宅が、隣接するエンテンザの家との境にプライベートを確保するために植えられたユーカリの成長ばかりではなく、彼らの要求する住居になるのに費やした時間がうかがい知れる。ケーススタディ#8の実現で、以後建築家としてのイームズは饒舌に語られるかみえだが、ビリー・ワイルダー邸やクイックセット・ハウスでの行き詰まりで、彼らの仕事は、家具デザイン、IBMパビリオンに見られるような展覧会のプロデュース、そして映像制作へと転向していった。

ウーム・チェアがプラスチックを用いた素材の腰掛け部分にクッションの上張りを行ったためコスト面で問題で量産に至らなかったのに対して、イームズは大量生産と合理性からプラスチック素材のみを用いたシェル・チェアを量産した。当時、第二次世界大戦によってカリフォルニアでは軍需産業が発達し、大戦後には新素材を用いての平和利用がすすめられた。特に、プラスチックとアルミニウムは早速イームズのカラフルな椅子のデザインに取り入れられ、1950年代には各地のスタジオムにはシェル・チェアが設置された。1950年代後半にはコスト面で問題を解決してアルミニウムを用いた椅子を発表し、60年代には空港やラウンジに取り入れられスタンダード・デザインを形成していった。

イームズ自邸

ケーススタディ計画は、1940年代から50年代にかけて、『アーツ・アンド・アーキテクチュア』誌を主催していたジョン・エンテンザを中心に進められた。1945年、エンテンザは8人の建築家と設計事務所、戦後の南カリフォルニアの家族にふさわしい住宅の設計を依頼したのである。ケーススタディ#8のイームズ邸は、太平洋を見晴らすサンタモニカの高地に建てられた。

映像作品について

イームズは新しい技術の探究と新素材から生み出されるデザインを追求し、それらは機能的なデザインへと結実していった。椅子を直線的に糸乱れぬ美しさで連結させることや、少ないスペースで重ねる(スタッキング)させることに、その美意識をみる事ができる。

1968年に制作された「パワーズ・オブ・テン・ラフ・スケッチ」では画面の横に表示されるダッシュボードが、この旅の水先案内をつとめる。目に見えない極大と極小の世界を、「指数」という方法を用いることで、この世で考えられる限りのスケールを表現した。L・Aに移って、ビリー・ワイルダーやチャールリー・チャップリンなどの映画人や、ケネス・アンガーのような実験映像作家との交流を通して、イームズは映像という新しい方法論を彼らなりに昇華させていったのである。

マルチ・プロジェクトの活用も含めて彼らの作品は、実験映像とも科学・教育映像とも一言でカテゴライズすることのできない、いわば未体験の魅力にあふれているのである。

文・構成/下川久美香
用語解説/木村美佐子

参考文献・出典

「Eames design:the work of the office of Charles and Ray Eames」
John Neuhart,Marilyn Neuhart,Charles and Ray Eames/H.N.Abrams(NY)
「パワーズ オブ テン 宇宙、人間、素粒子をめぐる大きさの旅」
フィリップおよびフィリス・モリソン、チャールズおよびレイ・イームズ事務所
訳：村上陽一郎・公子/日経サイエンス社
「イームズ自邸」 解説：ジェームズ・スティール/同朋社出版
「20世紀デザイン バイオニアたちの仕事・集大成」 ベニー・スパーク/デュウ出版
「20世紀の家具のデザイン」
ゼンバツハ、ロイトホイザー、ゲッセル/ベネディクト タッシェン
「現代アメリカ・デザイン史-スプーンからジェット機まで-」
A.J.プーロス 訳：永田喬/岩崎美術社
「モダンデザイン・100年の肖像」NHK 衛星スペシャル《世界デザイン紀行①》
/学習研究社
「デザインの現場」 vol.17/No.107/2000年2月号 /美術出版社
「室内」1969年8月号
「名作椅子に座る 武蔵野美術大学美術資料図書館近代椅子コレクションより」
「映像の先駆者シリーズ チャールズ&レイ・イームズの世界
ビジュアルコミュニケーションのバイオニア」 (LD解説書)/バイオニアLDC

Film Works of Charles and Ray Eames

イメージライブラリーで見ることのできるイームズの映像作品

文/構成 狩野志歩

Blacktop (1952)

洗剤で洗い流した校庭を水や泡がゆっくりと流れてゆく様が撮影されている。バッハのゴールドベルク変奏曲のゆったりとしたリズムに合わせて、手持ちカメラは刻々と変化する水の動きをクローズ・アップでとらえる。太陽を反射してキラキラと輝く水や、黒いアスファルトの上に様々な模様を残す白い泡は、変化にとんだ美しい表情を見せてくれる。

チャールズは以前からよく海岸で写真を撮っていた。打ち寄せる波や砂の抽象的な形に非常に強い興味を持っていたのである。また、カリフォルニアのオフィスのそばには学校の校庭があり、時折清掃で洗い流された水が道路に流れ出てくるのを眺めていたようである。その延長としてこの「Blacktop」は作られた。

2作目の映像作品で技術的にはまだ素人であったが、チャールズは手作りの編集機械を作ってディゾルブ（カットとカットを重ねてつなげる技法）や音楽とのシンクロなどの高度な編集作業に挑戦した。

イームズとしては珍しくクライアントのつかない自由な仕事だったためか、彼の形態に対する関心の深さが伸び伸びと表現されている。

ザ・フィルム・オブ・イームズ2



Eames Lounge Chair (1956)

ラウンジ・チェアはイームズを代表する名作椅子である。

1956年、このラウンジ・チェアの制作発表の為にチャールズとレイはTV番組に出演することとなり、デモンストレーション用に映像作品「Eames Lounge Chair」が作られた。

男が椅子の足らしきものを持っている。すると次々に椅子のパーツが現れ、またたく間にラウンジ・チェアが組み立てられてゆく。すると今度はみるみる分解・梱包され運び出されるのである。この間約2分。この短い時間の中で、この椅子の構造、組み立て・分解の手軽さ（全てをドライバー1本で行なっている）、座り心地の快適さが見事に表現されている。これまでの椅子と違い、ラウンジ・チェアのデザインは大量生産を目的とし、いつでも誰でも手軽に手に入れ、簡単に組み立て・分解ができるということアピールするには、この短さは効果があった。事実、この放映がラウンジ・チェアの販売促進につながった。

また、映像作品としてもそのデザインと同様、非常に明解な構成でありながら、ストップモーション特有のコミカルな動きや、ちょっとした演出がこの作品を単なる説明の為の映像ではない魅力あるものにしていく。

ザ・フィルム・オブ・イームズ5



Toccata for Toy Trains (1957)

チャールズ&レイ・イームズの世界
ザ・フィルム・オブ・イームズ2

ここで登場する汽車は全ておもちゃである。それも使い古してペンキの剥けた古いおもちゃで、大きさも素材もデザインも全く異なる汽車が、一つの世界に同居し、活き活きと走っている。また汽車にはおもちゃの人形や動物たちが乗り込み、なんとも楽しげである。

これらは模型ではないので、実際小さなものでは高さ5.6cm、大きなものでは30cmの汽車を同じスケールに見せるには、カメラのレンズや背景に気を配るなど、大変な努力を要したと思われる。しかし逆に映像だからこそ、このようなことを可能にしたのだろう。

では、なぜイームズは模型ではなくおもちゃの汽車にこだわったのだろうか。それは冒頭のチャールズ自身のナレーションによって知ることができる。

「これはおもちゃの汽車の映画です。(中略)これらの古い汽車は素朴な楽しみを与えてくれます。それは完璧なミニチュアの見事さとはひと味違った楽しみです。優れた古いおもちゃには素材に関しても気取ったところがありません。木は木の良さ、ブリキはブリキの良さが発揮されています。(中略)これらのおもちゃから、その時代が目指した創造性はどのようなものであったかというヒントが得られるかもしれません。それでは、すばらしい本物のおもちゃの汽車を御紹介しましょう。」



SX-70 (1972)

Something about Photography (1976)

ザ・フィルム・オブ・イームズ4
イームズ・コレクション17

SX-70はポラロイド社の開発した革命的なインスタントカメラである。これまでのカメラと違い、撮影してすぐに目の前で像が浮かぶSX-70は、写真をより手軽に身近なものにした。

イームズはポラロイド社から依頼を受けて*1このSX-70の宣伝フィルム「SX-70」と「Something about Photography」を制作した。これらの映像作品には製品のコマーシャルとは別に、イームズ独自の写真に対する思い入れと考え方が見て取れる。

初期の段階からスライド・ショーや写真で構成した映像作品を多く手がけていたイームズは、インスタント写真の即時性を高く評価し、日常的にもスケッチのようによく利用した。

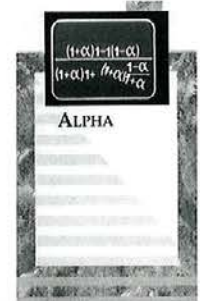
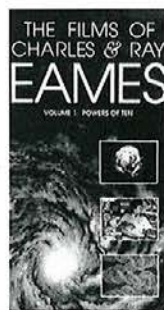
「Blacktop」でも分かるように、対象物をクローズアップでとらえたり、一部分だけを切り取りその形態を観察するのに写真は大変有効であった。例えば、台所に積み上げられた白い卵や、プレゼントの包みの赤いリボンなどが、カメラによって切り取られることで、全く新しいフォルムを浮かび上がらせるのである。

イームズにとって写真は、単なる素材でなくデザインを思考する手段の一つだったのだろう。



*1: 他にムービーカメラの宣伝フィルム「Palavision」も制作している。その一部がイームズ・コレクション2に「Lucia Chase Vignet」として収録されている。

チャールズ&レイ・イームズの世界



1930

1907 チャールズ、生まれる

12 レイ、生まれる

36 チャールズ、クランブルック・アカデミー・オブ・アート研究員となる

37 チャールズ、クランブルック・アカデミー・オブ・アート実験デザイン学部長となる

1940

40 レイ、クランブルック・アカデミー・オブ・アートで学ぶ
チャールズとサーリネン、オーガニック・デザイン・コンペで一等を獲得

41 チャールズとレイ結婚、ロスへ移住
レイ、「アーツ・アンド・アーキテクチュア」誌表紙デザイン
44 エバンス・プロダクツ社に合板成形部を設立 (→48)

42 プライウッドギブス制作 ▷

45 《プライウッド・チェア》

46 チャールズ、ハーマン・ミラー社のコンサル
タント・デザイナーになる
ニューヨーク近代美術館〈新しい家具〉個展



48 ハーマン・ミラー社の雑誌広告デザイン開始 (→53)

49 ケーススタディ・ハウス (自宅) 完成

文/構成 田中友紀子

Film

1950

50 ニューヨーク近代美術館
〈グッド・デザイン・ショー〉
展示デザイン

51 《ワイヤー・チェア》

50 《プラスチック・アームチェア》

《Traveling Boy》 50

53 史上初のマルチメディア技術を使った実験



55 《スタッキング・チェア》

52 《Blacktop》 52

56 《ラウンジ・チェアとオットマン》

《Parade》

《Bread》 53

《A Communications Primer》

58 《アルミニウム・チェア》

58 《アルミニウム・チェア》

《House-After Five Years of Living》 55

《Two Baroque Churches in Germany》

《Eames Lounge Chair》 56

《Meet Me in St.Louis》

《Stars of Jazz》《Day of the Dead》 57

《Toccata for Toy Trains》

59 モスクワ万博〈アメリカ館〉展示デザイン

60 《タイム・ライフ・チェア》

58 《アルミニウム・チェア》

《The Expanding Airport》 58

《De Gaulle Sketch》

《Music Sequence》

61 〈マセマティカ〉展示デザイン

62 シアトル万博〈科学の館〉展示デザイン

64 ニューヨーク万博〈IBM館〉展示デザイン

65 〈ネール〉展示デザイン(→66)



《Kaleidoscope Jazz Chair》 60

《IBM Mathematics Peep Shows》 61

《Two Puppet Shows》《IBM at the Fair》 65

《Westinghouse in Alphabetical Order》

《National Fisheries Center and Aquarium》 67

《A Computer Glossary Or,Coming to Terms

with the Data Processig Machine》

《Powers of Ten :A Rough Sketch》

68 《チェース》



69 《ソフト・パッド》



《Tops》 69

1960

70 チャールズ、ナショナル・カウンシル・オン・アーツのメンバーになる

71 IBM 展示センター〈コンピュータの将来〉展示デザイン

72 IBM 展示センター〈ニコラス・コペルニクス〉展示デザイン

73 ニューヨーク近代美術館〈チャールズ・イームズの家具〉展

75 〈フランクリンとジェファーソン〉展示デザイン (→76)

76 フレドリック・ホワイト・アートギャラリー

〈コネクションズ:ワークス・オブ・チャールズ・アンド・レイ・イームズ〉展

78 チャールズ死去

88 レイ死去

Eames Biography

1970

※フィルム作品はライブラリー所蔵のものを中心に構成している。

「デ ジャ ヴュ」

スイス 1987年 96分
監督/ダニエル・シュミット
出演/ミシェル・ボワタ 他

ダニエル・シュミットが故郷のスイス・グリゾン地方を舞台に描く幻想的な一遍。グリゾンはアルプスの山岳地帯に位置し、いずれは滅んでいくと思われる第四公用語・ロマンシュ語が使用されている。主人公にとって、そこはまさに異邦だ。

ジャーナリストのスペシャラーは、17世紀の革命家・イェナチュを研究するトブラー博士のもとを訪れる。博士は声高に自らの研究成果を訴える。その痩せて老いた身体が演じるのはイェナチュ暗殺の場面。イェナチュを英雄に仕立て上げた城主殺害の斧が、いま、彼自身に振り下ろされる……。

一体、誰がイェナチュを殺したのか？歴史が残したグリゾン解放の英雄に関する謎を軸に、スペシャラーの手に渡るべくして渡った、イェナチュが死の際に握ったという鈴が、真実と憶測、幻影が錯綜する旅へと彼を導く。トブラー博士を墓泥棒として暴くため、グリゾンへ調査に赴いた彼に異変が始まる。鈴の音に誘われ、彼は幾度となく現代と中世とを往来する。謎めいた現代の女城主が「ベストが近づいている」とスペシャラーに言えば、彼は中世の山村にベストの犠牲者を見出し、また、彼女が暖炉の前に立ち「城主はここで死んだのだ」と言えば、彼はユダのような非情さで告白する。野望に燃える革命家に問われ、「暖炉の中に」と。

シュミットの語り口は巧妙だ。『トスカの接吻』で軽やかに夢とうつつを融合させたように、しなやかに現在と過去とを紡ぎ、観客さえも迷宮の奥深くへ押しやる。果たして目の前の惨劇は、伝聞から触発された神経症的追体験か、未来が過去に荷担した結果か、白日夢か、前世の記憶か……。けれど女城主の言葉には、そういった謎解きへの執着から私たちを解放させる威力がある。「私はここにいます。そばにはかつてここにいた人々がいて、ただ、時間の流れが私たちの間に違いを作るだけ。」

(木村美佐子)



編集委員 板屋 緑一映像学科 教授
下川久美香 狩野 志歩
木村美佐子 田中友紀子

イメージライブラリー・ニュース 第7号 2001年4月発行

武蔵野美術大学 イメージライブラリー
〒187-8505 東京都小平市小川町1-736
TEL/FAX 042-342-6072
禁無断複製・転載



「田舎の日曜日」

フランス 1984年 94分
監督/ペルトラン・タベルニエ
出演/ルイ・デュクレール 他

1912年、初秋の日曜日、パリ郊外の自然にめぐまれた場所、家政婦メルセデスと過ごす老画家ラドミラルのもとへ、パリに住む息子のゴンザーグの一家と娘イレーヌが訪れる。事件らしい事件が起きるわけではない。とりたててドラマチックでもない人生の、小さな、しかし大切な何かについて、この映画は静かに語りつづけている。

美しい秋の陽射しが、樹木や緑に覆われた地面にゆたかに降りそそいでいる。子供たちは外を駆け回り、久しぶりの田園生活を楽んでいる。年老いた父親と息子と妻、3人の孫たち。過ぎていく時の流れが、人生の時の流れと重なり合う。すでに他界したラドミラルの妻は彼の心の中に生きていて、それがフラッシュバックする。

昼食を終えて、静けさに満ちた昼下がりの庭、お茶の時間、老画家は戸外で午睡に入る。息子夫婦は家の中へ。ゴンザーグも画家を志望したことがあるが、才能や父との関係で止めたと妻に語る。

そこに静寂を破るように、犬をつれたイレーヌがパリから車を飛ばしてやってくる。犬の名はキャビア。背の高い奔放な独身女性、パリで装飾品を扱う店を出していて、今日は昼食がキャンセルになったので来たと告げる。未婚の娘を気にしながら、父親は彼女を深く愛している。二人はドライブに出かける。印象派の画家たちの絵のような田園風景の中、運河沿いのガングットで父娘がおしゃべりをする。セザンヌ、ルノワール、マネ……彼らのように大胆なことは何もできなかったと娘に言う。それで良かったんじゃない、と娘。娘が父親を踊りに誘う。わずかに傾きかけた陽射しの中で、二人は踊りつづける。実に至福の時である。

家に戻ったイレーヌは電話をかける。何か嫌悪な雰囲気の中、パリにとって返し、彼女なしの夕食の卓を囲む。ラドミラルは皆を駅まで送っていき、一人戻ってくる。庭には敷物が敷かれ、若い妻が子供たちを呼ぶ、幼いゴンザーグとイレーヌが家から駆け出してくる。冒頭の真っ暗な画面から、聞こえてきたのはこの会話だったのだ。

全篇に流れる同時代の作曲家フォーレの曲、豊かな田園風景と庭、身だしなみを整えた一族の肖像、フランス中流階級の過ぎた20世紀初頭のひと駒である。事件はなにも起こらない。静かな時が三代それぞれ登場人物の中を通り過ぎていく。

この静かな映画が語ろうとしていることはあまりに多い。そしてまた、21世紀初頭に私たちはどのようなシーンを描いているのか、とも考えさせられた。最後に、老いた父親が子供達をイタリア各地を訪ねる『みんな元気』という映画をふと思い出したことをつけ加えておこう。

(長尾重武 学長/建築学科教授)

シネマ 将軍